

序

毎年、誰もが何らかの依頼原稿や学術論文を発表していると思うが、私の場合、その都度所属先が変わっていることが多い。学会で「先生、また職場が変わったのですか（笑）？」が挨拶であったりする。自分の意志で頻繁に異動しているわけではないが、本や雑誌に掲載されている自分の所属を眺め「そういえば、この時期あの病院にいたなあ」と思い出にひたつたりと、それはそれで楽しいものである。

今回は東京歯科大学市川総合病院放射線科で作り上げた一冊である。症例集であるが、症例の説明の前にマクロの解剖、MRI解剖（横断、冠状断、矢状断すべて）、神経の走行など、類をみないほど多く掲載しているのが特徴である。これは足の解剖がよくわからないから読影をするのが苦手だ、という多くの放射線科医の声を汲み取って作っている。マクロの解剖が加わることより、MRIの画像をより頭の中で三次元化できると信じている。さらに当院では骨軟部腫瘍の症例が非常に多いため、本書でも『腫瘍性病変』の章は充実した内容になっている。足には稀な腫瘍に関しては、参考として他の領域に存在する腫瘍を掲載しているため、一般的な骨軟部腫瘍の調べ物をするのにも役に立つと思われる。

『外傷』の章では、特に靭帯損傷のバリエーションを展開し、正常と異常の境界線が明確になるように心がけた。また、普段あまり意識することがないと思われる足根骨の小さな骨間靭帯についても言及している。

日本語表現が混同している“付着部炎”と“付着部症”，“腱炎”と“腱症”などについても誤解がないように解説した。痛風やピロリン酸カルシウム結晶沈着症など、好発部位や所見が類似している場合は同じ関節で画像が比較できるようにした。

画像は主にMRIを中心に掲載しているが、単純X線写真（もしくはCT）の方が正確な診断ができる場合は「MRIは不要」と書いてある。これは、あまりMRIだけみて診断するな、という啓蒙の意味もある。文章は短く、なるべく簡潔に書くことを心がけた。

本書執筆にあたり、東京慈恵会医科大学放射線医学講座の福田国彦教授はもとより、東京歯科大学市川総合病院放射線科の仲間たちには、通常の仕事から、症例集め、その他何から今まで本当に世話になっており、感謝してやまない。当院放射線技師の皆様も、いつもクオリティの高い画像を提供していただきており、厚く感謝を申し上げる。最後に、出版にあたりご尽力をいただいた羊土社の杉田真以子氏、嶋田達哉氏にも厚くお礼申し上げる。

2014年5月

小橋 由紋子